落葉

『新壑』1
46-1号

立看板風に吹き倒れ其処のみに昏らき落葉のざわめきは
立つ

逢はざるままの平穩と肯ふ凜凜と榉の裸形は

零の位置少しくずれて小秤は吾が暗鬱を捉へてゐたり

あて

当字多き書簡かたみに交しつわれらの秋の他愛もあらぬ

身のどこかみづみづ残れる個処あらむかくばかりにやさしき
夜雨の音

冬

『新壑』
46-2号

雪乗せて重たく揺るる鞆の風の遊びに夕昏れは来る

人との差いくばくありやはつはつと自らの証となす曇天の冬

降りかかるもの蹴散らし蹴ちらしゆく吾に冬冒頭の空の
沈鬱

四囲閉ざされ己れ孤りにもどる刻ひそかに冬のがれ燃
やす

坂下るバスより見ゆる風の夜の低き 舎に揺らぐ灯の色

純白の雪

『新壑』
46-3号

邂逅を持たざる冬の今にして未明の雪のひたすらなる白

人の計に踏み分けふみわけゆく道におろそかならず雪の純
白

夜の灯に滲める雪の街川へ降りそそぎゐて 訣れ鈍らす

の 自縛の縄灼けつくすがに夕映えよ無謀と云へど如まし失踪

ふ うつつにはあらくなく坂の幾つかを超えしばかりに冬陽かがよ

冬の猫

『新壱』46-4号

雛の壇いくとせ飾らぬ昏らき部屋
弥生は明るく灯ともすなり

いささかも揺るる自在は宥されず
雪深き中の園の鞆

夕闇にまぎれて猫の蹲くまる階下し
きりに二月風吹く

吾が怒り謐かに充ちるる夕闇に
欠伸せる猫の舌緋きかな

もの狙ふ異様に鋭き猫の瞳の真中に
燃ゆる冬の落日

冬の証

『新壑』
46-5号

遁れ身の流れ素早き春の川いづくの涯に清濁わかつ

糾すべく身に夕映えは眩ばゆくて雪の白き真闇にまぎれゆ
く

雪野に立つ一樹より淋しき冬かとも復りくる言葉のなべて
は襜褕

誰をも従へず長く歩みきて捉はるるなき春の泥濘

夜の風にまじりて韻くものの音捉へやうもなき苛ら立ちに
あつ

春の乳母車

『新壑』
46-6号

あわあわと乳母車に充たす春の雪悲鳴とも歡喜とも赤児
の声は

ずたずたに裂かれゆく怖れ身近かなれば冷えて鋭き夜の手
鋏

壺の内部に溜めきし悲傷の溢れきてさまよふならむ今の
暗闇

追憶は青き海原ひとは水の謐けさに語りかくるも

逝く雲にこころ置くごと捉へようなく寡然にわれは吾を距
てつ

連翹

『新墾』
46-7号

葉桜となりし夕べの風乾きありようもなき罪科におののく

はな

五月風やさしく連翹を吹き過ぎて黄まみれとなる午の睡
りは

くるま

みどり児ならぬ緑の頭のぞかせて乳母車の中の大束の葱

一片の詩句もなくて身の終りさみしと告げて海に立ちた
り

少しづつ疎まれるしか翳もつ部分淡き灯火に貌を寄せらるつ

こでまり

『新壑』
46-8号

揺り椅子の揺るる自在をねむごろな憩ひとなせり冷ゆる
夏至の夜

受話器にて誘ふその声やさしくて風通る音のかすかに捉ふ

壮年は畢りとならむ抱へもつ壺のひとつの量はさみしき

かさ

汚れなく過ぎしひと日の指ひたす水は湖水の冷たさなら
ず

寝ねぎはも目醒めのきはもさわやかに身のほどり五月漂ふ
べし

孤り

『新墾』
46-9号

まぼろし

告げ得ざる寂みしさつなぐ闇ありて闇のま中のひとつ幻影

みづからの弱さを映す壁ありて騒がしきまでの孤りの饒舌

昂ぶりはつね鎮ませて咲くものをむらさき極む鉄線の花

母畑のかなたに駒がむ母の貌赤児かと思ふまでに小さし

母の背と吾の未来を累ねるていつの日暮れもただよふ静謐

花の種子

『新壘』
46-10号

花舗に見し百花の種子を眼なうらに播きゆく夏の土乾き
たり

中空にかすか揺れるる鉄塔も身の危ふさも輝やきるたり

水壺月のみずの上なるみどり葉に翅をやすめる揚羽の蝶は

みどり葉に万の言葉そよがせて一樹をめぐり風の立ちくる

手鏡に捉へし空の暗鬱やみづからの表情とひと日臥しをり

翳

『新壑』
46-11号

喧噪の溢れし街よ刃物屋に研がれしものしづかなる午後

更けて尚灯もらざる窓の静謐にこの夜のこころ騒がず眠る

沈黙の背に冷えてせつなく吹き溜まり風は一途に秋の色も

つ

立つ風にそよとも揺がぬ一樹あり掬りゆく吾れのままなま
しけれ

誘ふがに朝のこころにひびききて流れやさしき地下水の音